

んですね、リセットできちゃうからね。もう気に入らんかったらぱっと消してからまたゼロからやり直す、社会でそんなことできない、だから何か我慢することができないし、相手のことを考えなくて自分の一方的なことで事を進めていってるコンピューター社会、気に入らんとまたゼロにしてまたやり直す、人生はやり直しがきかないんです、リセットがきかないんです。人間はリセットがきかないんです。だったら、そういうふうなことができないよう、やっぱり相手の立場、お互いに、それをすることしか僕ないんじゃないかなって最近つくづく思うんですけど、それをどういうふうにご供たちに伝えていったらいいのか、今市原さんが一生懸命それをなさっておられるし、佐々木さんも今一緒にそれなさってるし、そういうふうなところから人を育てていく、徳育ではないですが、僕はそのところに、相手の立場に立って物を考えていただきたい、それが予防になると思うんですね。

○コーディネーター(川崎政宏)

ありがとうございました。

今、高橋さんは、倉敷で毎月1回同じような立場、大切な家族を失った方たちの分かち合いの場を持っていただいて、今その中からいろいろ感じとられることをお話していただいたんですけど、どうしても、今日は犯罪被害の問題、被害に遭った方が地域の中で孤立しやすい、それは偏見とかなかなか理解してもらいにくいところから生じていく問題ということが背景にあって、それは自殺とか大切な家族を急に亡くなった方たちの悲しみもなかなか理解してもらいにくい、そういうことを語る場が地域の中にないということで、こういう分かち合いの場を持ち始めたわけですね。市原さんも、最初は犯罪被害者の自助グループ、セルフヘルプのグループを呼びかけたところからかわるようになっていったと思うんですが、市原さんの方から少し分かち合いの場の補足をしていただけますか。

○シンポジスト(市原千代子)

私は、高橋先生、川崎先生と、交通死の、交通事故で大切な方を失った遺族の方の自助グループを毎月第3土曜日に開催しています。その中で感じたこと、聞いたことなんですけれども、実はファミリーズには、交通事故もですけれども犯罪で十数年たってからやっと電話をかけてこられて、自助の集まりとかに、そういう被害者、私たちの場所につながってこられた方がおられます。そういう方の声をお聞きすると、ある息子さんを亡くされたお父さんが言われたのは、奥様が、十数年間お墓参り以外は買い物にも全く出ないで家に引きこもりに近い状態であるということを言われました。それからまた、ある交通事故でご主人を亡くされた奥様は、それまで持ったことのない感情を持つ自分はおかしいんじゃないかと思ってずっと暮らしてきたと。私たちと話をする中で、自分はおかしいことは決してなかったんだっていうことを再認識したっていうことを言われた方がおられました。そういうことをお聞きしている中で、なぜ今分かち合いの場、大切な方を亡くされた、自死であるとか、病気で突然大切な方を失った方につながっていったかということ、そういう方たちも本当にそういうやはり同じ思いを抱えてるということを感じたからなんです。先ほど言ったように、十数年間家から一步も出られない奥様の場合、例えば岡山で私たちがそういう集まりを持っていても、岡山まで出てこられることはまず不可能です。**地域で、やはり小さな集まりでいいから、そういう大切な方を失った同じ思いを語れるような場所があれば、こちらから声をかけて出向くことがあれば語ってくれるかもしれないという思いを感じるようになりました。**そういうことから、岡山でするだけではなくて、地域で、例えば倉敷であれば倉敷周辺の方、それから例えば津山とかいろんなところであるようになれば、その地域のそういう悲しみを抱えた方たちが集まってこられるかもしれないっていう思いがありました。そういうことを地域でやっていく中で、**犯罪だけが特別ではなくて、いろんな思いを語る場所ができれば違ってくるのではないかっていう思いがあります。**

それと、先ほどからちょっと言ってますけれども、犯罪被害に遭って、私たち親以上につらい思いをしている子供たち、子供たちを本当にちゃんと家

庭で受け入れようと思うと、まず大人のそういう悲しみ、深い悲しみ、グリーフなんですけれども、そういうことを吐き出せる場所がなければ、やはり家庭は子供が安心できる場所ではないと思います。そういう思いから、この夏に、子供たちのそういう、**大切な家族を失った子供たちのグリーフケア**を実践している**アメリカのオレゴンのダギーセンター**というところの研修プログラムを受けてきたのですけれども、プログラムのテキストの中にちゃんと書かれているんです。そういう悲しみを経験した子供たちで適切なグリーフサポートが受けられていない子供たちは、将来精神的な病気、不安である、うつであるとか、それから精神疾患の病気を併発したりとか、また最悪の場合は犯罪を引き起こしたりするような、そういう問題を起こすような子供たちにつながっていくって言うことがはっきりここに書かれてあったんですね。だから、そういう意味で、子供たちのケアは必要で、それと合わせて、大人たちのケアも大切で、ダギーセンターでは子供たちのケアが行われている時間に大人たちのケアも行われているということをちゃんと聞きました。だから、そういうふうに、大人たちも子供たちもそういう深い喪失を語れる場所があることって言うのはすごい大切なことだと思います。だから、倉敷の分かち合いの場が1つだけではなくて、これからいろいろな地域で小さな集まりを少しずつできていけばいいなと思います。

それから、多分昔は地域の中で、お寺とかそういういろんなところを含めて、こういう思いを語れる場所って言うのは本当はあったんだと思います。親子3世代同居とかそういう形の中で語れる場所があったんだと思うんですけれども、今は本当にそういう思いを語れる場所って言うのはないと思います。私も事件後、語ろうと思うと周りには本当になかった、だから東京や大阪の仲間たちのところに出ていくしかなかった状況がありました。だから、そういうこともあって、今後そういうことが地域で根づいていけばいいなってすごく思っています。

○コーディネーター(川崎政宏)

ありがとうございました。

当事者でないと、一番最初そういった偏見とか無理解を超えてわかり合えない部分っていうのが、最初の取っかかりのところではどうしてもあるのかなという思いがあります。

また、市原さんが少し触れていた子供たちですね、大切な家族を失った子供たち、本当に身近な問題として接する機会が皆さんも多いんじゃないかと思います。そうした大切な家族を失った子供たちへのかかわりということから、平賀さんの方で、何かご体験とかそういったことございますか。

○シンポジスト（平賀和治）

今までは、犯罪被害と、それから子供たちのかかわりを話をしていたんですけど、今の市原さんのお話を聞いていて、犯罪被害と教員、教師の意識というか、そういうところにも非常に大事な部分があるのかなあというふうに思いました。先ほどの市原さんのお話の中では、あるご家庭のご婦人が家を出れなかったというお話があったんですけども、子供たちというのはやっぱり学校がありますから、けなげに学校に出てくる。今では不登校というようなことも可能性はありますけども、やはり多くの子供たちはそういった不幸な犯罪被害というか、**親が亡くなった場合にでも何日かすると学校に出てくる。**そういうときに**教員が、そういった犯罪被害者に対するケアの心を持っていなければ、**経験則の中でそういった子供たちにどう接したらいいかっていうことは一般的に教員は持っていますけども、**その子にしっかりと寄り添ってその子の心を解きほぐす**ような、先ほど来ずっとあったような、しっかりと話を聞いてあげるとか、そういったことが教員には求められるかなあというふうなことも感じました。

それからもう一つは、自分の担任している子供を、自分が担任しているその1年間の中で、子供がそういった不幸な目にもしも遭ったとすれば、担任はすぐにそれが認識できてますからかわられるんですけども、それが二、三年前におうちの方が例えば交通事故で亡くなった子を二、三年後に担任した

場合に、そういった情報がなければ、交通安全指導だと称して具体的な事故の様相を話をしながら、子供たちにこういった事故があるんだよってというふうな話をしたときに、やはりそこにいる交通事故でおうちの方を亡くされた子供にとっては非常につらい時間になってしまう、そういうことを考えると、やはり**教員というのは子供の背景にあるいろいろなことも十分理解しておかなければいけない**のかなあと、今で言う片親の家庭というのは案外あるわけですが、その家庭の背景というのを理解して子供たちに接しないといけないのかなあとというふうなことを非常に強く感じました。その反面ですが、今の個人情報ということがよく言われる社会の中で、そういったことを教員がすべて把握することができるのかってということもちょっと今どうなのかなあとという困難さも感じているところです。

○コーディネーター (川崎政宏)

どうもありがとうございました。

時間も残り10分となってきましたので、少し後半は学校の現場の問題であるとか、それから地域の中での悲しみの分かち合いの場の話、少し話が広がったように思いますけれど、逆に身近な問題としてお一人お一人が身近な方の死の問題、あるいはその後の生き方の問題、そういったことを考える中で何か気づきを得ていただければという思いで少しお話を取り交わしていただきました。

それでは、シンポジウムの最後の締めくくりとしてパネラーの方からお一人お一人、今日のシンポジウムを振り返っての気づきであるとか感想とかをいただければと思います。

高橋さんの方からお願いします。

○シンポジスト (高橋幸夫)

今日、こんなにたくさん集まってきたいただいて、僕たちの話を聞いてくださること自体がもはやありがたいなと、もうこれで、これが支援になって、

聞いて、傾けてくださったっていうことがもはや僕にとってもう満足なんです。こういうふうな、本当にわずかな、わずかというか、この支援というのは仰々しいものでも何でもなくて、理解してやろうと、ね、相手の気持ちをちょっと聞こうか、ね、ああそうかとそう思うてくださること、その姿勢があればもうそれで支援じゃないかと、それで助かるんです。佐々木さんに僕一番最初に話を3時間聞いてもらって、3時間大変なんですよ、3時間、それだけその話を聞いてくださるということはすごく助かったですね。その気持ちを、皆さん支援とは大変だなんて思わずに、世間に目を向けて、世間の声を聞いて、あるいは子供たちの声を聞いて、聞いて聞いて聞いてというような形をされたら、その中から見えてくるものがあるような気がするし、その中に心の通いが出てくると思うんで、それが僕は支援だと思っております。

以上です。

○コーディネーター（川崎政宏）

市原さん、お願いします。

○シンポジスト（市原千代子）

本当に高橋先生が言われたように、こんなに大勢の方に今日は集まっただけだと思いますでした。私たちの話を聞いてもらうことから、支援が始まると思います。私も学校に行かせて、話させていただくことになった過程などから、行政の方など、たくさんの方と今かかわらせていただいています。その最初は皆さん頭を抱えられました。私たちにどう接していいかわからないというところから本当にスタートしていただきました。でも、一歩踏み出してくださいってお話をさせていただく中で、とてもいい関係を今たくさん私は築かせていただいています。

その中で、ちょっとだけ話が戻るんですけれども、学校現場のことでちょっとだけ補足させてください。先ほど平賀さんご紹介くださった男の子のよ

うな子がたくさんいる学校にこの日曜日に呼ばれていきました。いわゆる、荒れている中学校という学校から講演依頼をもらいました。先生もすごい悩みながら依頼をくださって、どうしたらいいんだろうって、子どもたちがとても私の話が聞ける状態ではなくて失礼になるかもしれないということで、すごく悩まれながら恐る恐る電話をしてこられました。そういう中でその学校と打ち合わせを重ねました。先生も、周囲の理解をなかなか得られてないんで、私が来ても、私が行くことすら本当は難しい部分があるということも正直におっしゃいました。でも、依頼は夏休みの前にいただいたんですけれども、夏休みの間に先生は、学校や保護者の方とすごい連絡をとったり調整をしてくださったみたいで、夏休みの間に、学校内部や保護者の方の理解を得られたからということをお電話をいただきました。そこから細かい打ち合わせをしながら、つい先週日曜日に講演をさせていただきました。子供たちは、まだ本当にずっと落ちついて話が聞けるという状態ではありませんでした。さっきの子供、平賀さんが言ってくださった男の子も、本当にちょっかいを出したり、右向いたり左を向いたりしてたんですけれども、ふと見ると、私目の縁にずっと入れてたんですけれど、ふと見ると本当に真剣に聞いてくれる時間が実はありました。やっぱり照れくさいから、また後にごまかしているのもわかりました。そういう子供たちがたくさんいる中学校でした。でも、その子供たちもずっとやっぱり話は聞けないんですけれども、間で真剣に聞いてくれる時間が何回かあるというような講演でした。それに至るまでに先生方は、子供たちに何とか自分たちの思いを届けたいと話を詰めて詰めて、細かい打ち合わせをして、道德の時間を持ってくださるとかいろんなことをしてくださいました。先生がその打ち合わせの中で言ってくださったのは、子供たちを何とか変えたい、変わってほしいという思いで私に依頼をしたけれども、市原さんだけに任せるのではなくて自分たちも何かできないかなと思いましたっていうことを。そして、本当に教頭先生がギターの弾き語りもしてくださったりとかいろんなことをしてくださいました。そういうふうに、私に講演依頼をくださったことで、学校の中、先生方の意

識もすごい変わったみたいです。それから、地域の保護者の方たちの思いもすごい変わったみたいです。そういうふうに、いろんな方たちが動くことが子供たちの意識を変えることにすごいつながっていくのではないかって思いました。大人たちが一生懸命自分に向き合ってくれているということが伝わるということが子供たちにとって一番大切なことなのではないかと思いました。そういう、講演も今は入ってきています。そういうことが、多分将来私たちがもっと生きやすい社会につながっていくのではないかなっていう手ごたえも子供たちの目の中から、目の光りから感じてるのも事実です。済いません、長くなりましたけど。

○コーディネーター(川崎政宏)

田中さん、お願いいたします。

○シンポジスト(田中唯一)

警察は、最初に被害者の方と一番最初に接するんですが、警察ではできない部分が多くあります。きめ細かい支援とか、それから公営住宅の優先入居とか、こういったことに自治体のご協力がないとできませんので、今後、ファミリーズ、それから警察、それから教育委員会が、あと市民の皆さんと一緒に支援していくということで、今後ご協力をよろしくお願いします。

○コーディネーター(川崎政宏)

佐々木さん、お願いいたします。

○シンポジスト(佐々木裕子)

高橋先生とお会いしてから、また何度か会っていくうちに気づくことがその都度増えていきました。ですから、今日のような会の中でいろいろな当事者のお話やら現場のお話を聞いて、私たちも正しい情報をできるだけ多くの方に知っていただくことが大切だし、そのことで偏見とか差別とかなくなっ

ていくんだろうなあと思いました。今日は本当に貴重な機会だったと思います。

それとあわせて、子供、さっきは被害者の子供の話があったんですけども、子供というのは、親に対して心配をかけてはいけないとか迷惑をかけてはいけないとか、親のつらいのを見ると中に閉じ込めてしまうもので、それが反動になって学校に行けなくなったりとかするケースが多いようなんですが、そういう子供たちに対して大人がどんなサポートができるか、学校の現場の中で子供の健全な育ちに向けて、教育も含めてですけども、教育や食の問題、それから子供のサポートの問題、教育現場にまだまだこれから課題が大きいんじゃないかなと思っています。

○コーディネーター（川崎政宏）

平賀さん、お願いいたします。

○シンポジスト（平賀和治）

はい。時間が過ぎましたので簡単にまとめさせていただきます。

私もこの会に今日来させていただく中で、最後にどんなことが言えるのかなあと感じていましたが、今思っていますのは、高橋先生が冒頭おっしゃられた、「亡くなった命は返ってきません。思いやりを大切に、優しい、お互いに思いやりの心を持ってください」と言われた言葉が非常に印象に残っています。私もたまたま昨年この立場の仕事について、昨年いじめの事件が起こって、いじめの専門の担当官みたいなことで、いろいろないじめのこの会議に出たりしていますけども、その中でずっと言い続けてきたことが、「命を大事にしましょう」、それから「思いやりを大切にしましょう」ということでして、今日高橋先生が冒頭それを出されたということが非常に印象深く、この2つの事柄、人間が人間として生きていく上で一番大切なものなのかなあとというふうに感じています。教育委員会、学校現場の方でも、しっかりと子どもたちにこの気持ちを身につけさせていきたいと思っています。どう

か、家庭や地域の方からも、そういったことを子供たちに身につけさせるような声かけやそういったことをお願いできればというふうに思いました。ありがとうございました。

○コーディネーター(川崎政宏)

どうもありがとうございました。

それでは、時間も来ましたので、本当に今日は長い時間皆さんありがとうございました。今日のシンポジウムのタイトルのとおり、「命の大切さ」、それから「語り継ぐ」こと、そして「まちづくり」、それぞれの意味合いがあらうかと思います。皆様一人一人が、地域の中で今日のお聞きになったことをご自分の問題として考えて、持ち帰って考えて実践していただければと思います。本当に長時間、今日はシンポジウムに参加していただいてありがとうございました。これでシンポジウムを閉じさせていただきたいと思います。

○司会

これですべて終了します。気をつけてお帰りください。ありがとうございました。